四万十町のくらしの人権課題

みんなが男女（ひと）

パート3

「男女共同参画講座in四万十町　講談『龍馬とおりょう－幕末を生きた女性たち』」が10月8日に旧都築半平別邸で開催され、真打講談師 宝井琴桜さんが、龍馬と共に生きた女性たちの生き方を熱く語りました。

講談　龍馬とおりょう　―幕末を生きた女性たち

おりょう（1841～1906）

寺田屋騒動で一命を取り留めた龍馬とおりょうは結婚し、霧島への日本初の新婚旅行はよく知られています。結婚生活は龍馬の暗殺によりわずか1年3カ月で終焉、おりょうは再婚しましたが、死ぬまで坂本龍馬の妻と言い続けました。

女がひとりで生きていく事が今より厳しい時代を生きたおりょうの辛さと断ち切れない龍馬への思いが時代を超えて、切なく伝わってきます。

おとめ（1832～1879）

龍馬の母親代わりとして、大きな影響を与えた姉乙女は「坂本の仁王様」と言われるほど大柄で、米俵を片手で持ち上げる力持ちでした。男ならもてはやされる大力が災いし「恐ろしい女」と云われ、姑と折り合いが悪くなり離婚されました。乙女は娘・岡上菊枝（児童福祉の先駆者）に武術や運動を仕込み、「男のすることで女にできぬものは何一つない。いずれは男も女も同じ仕事をする世がやってくる」と口癖のように言っていました。現代の男女共同参画社会を予言するようです。

金沢のおかかたち

龍馬やおりょうと同じ時代金沢では米の値上がりに耐えかねた、おかか（おかみさん）たちがみんなで知恵を絞り、お城に向かってお殿様に「声あわせ」で訴えたといいます。老若男女千人の声がお殿様に届き、お蔵米が放出されました。力の弱いものでも声を合わせ、力を合わせて行動することの大切さをおかかたち（女性）が身をもって示してくれました。

（幕末には他にも、こんな女たちがいました）

宝井琴桜さんが女性初の真打講談師になったのは昭和50年、女性講談師は琴桜さんたった一人でした。それから35年、女性講談師は実に、50%になったといいます。封建的だと思われた講談界が一足先に男女共同参画社会を実現したのです。か弱いながら力を合わせたおかかたちのように、老若男女が声をあわせて一緒に、女性も男性も暮らしやすい社会にしていきましょう。

男と女のつぶやきは来月発表します。おたのしみに。

〔お問い合わせ先〕町民課　☎22-3117